

4 博物館評価



博物館評価(2014年度)

I 博物館評価について

2010年度より、当館では事業戦略会議ワーキングチームを立ち上げて、博物館評価(自己評価)の作業を開始した。この博物館評価は、NPOが指定管理者として管理運営をする中で、事業のみならず博物館活動全般において、それまで行ってきたことをチェックして改善をはかるために実施している。ワーキングチームのメンバーはNPO法人野田文化広場事務局長と学芸員4名で、検討内容の途中経過は隨時、その間に開かれた企画事業委員会や法人の理事会で報告して意見を聴取してきた。

博物館評価表(A3折込)は、当館の3つのミッション(13ページ)を大項目とし、これに対応するようにして、それぞれの具体的な目標となる中項目を設定した上でさらに具体的な評価指標の項目をあげた。そこに、指定管理運営となった2007年度以降のデータを入れ、経年的な推移を示している。またモニタリング調査等で収集したデータを加えている。

II 自己分析(Check)

①博物館機能を充実させる

資料収集や調査研究等の博物館の基礎機能を充実させる。博物館の基礎機能とは、博物館の存在基盤であるコレクションのマネジメントである。2007年度以降、本格的なコレクションの収集、整理、保管管理と公開に向けた準備作業を行ってきた。また、その情報を公開することも進めている。

【現状評価】

資料収集の状況について、収蔵点数(1)に関し、新規収蔵点数は昨年度と比べ減少した(282点)が、寄贈された資料件数(2)は前年度と同数で、例年並みであった。これは、本年度は1件複数点の紙資料の寄贈が、昨年度よりも少なかったためである。収集方法は寄贈や購入を主とし、不必要な寄託が行われないよう留意されている(3)。資料購入は昨年度よりも購入総額は下がっているが件数は増加しており、予算を効果的に活用して必要な資料を購入することができたと考えられる(4)。また、昨年度に引き続き移管資料はなかった(5)。

資料の保管状況について、本年度は燻蒸の実施年度ではなかった(6)が、粘着トラップによる収蔵庫の定期的なモニタリングを継続して実施した。虫害等は発生していないが、定期的な点検は不可欠であり、今後も今年度と同程度の回数(7)を維持していく予定である。

資料再整理業務の実施状況を表す収蔵庫での作業日数(8,9)については、昨年度同様にそれほど多い日数でないが、これは、今までに蓄積してきた資料情報のデータベースへの入力作業に力を入れて行ったためである。3月にはホームページに新たに設けた「資料データベース」で368点の資料を公開することができた。今後も継続的に整理・入力を進め、公開数を増やしていきたい。

学芸員の活動について、学芸員の講演回数は昨年とほぼ同数となっている(10)。学芸員による館外調査の件数は例年にくらべ大きく減少している(11)が、これは今年度の特別展が例年よりも早い7月に開催されたため、調査自体も前年度から行っていたことや、市民が主体となって行う市民の文化活動報告展が開催されたためである。館蔵資料閲覧の件数(12)は昨年度と同数であった。新規収蔵資料の公開は引き続き企画展「野田に生きた人々 その生活と文化」の展示スペースの半分を充てて行い受け入れ件数ベースですべて紹介をした(13)。博物館の資料収集活動についての市民への説明責任を果たすと同時に、展示内容に変化を生み出す意味でも効果的に機能している。資料貸出件数は例年並み(14)であるが、近隣の博物館で醤油に関わる展覧会が複数開催されたため、醤油番付や看板などの醤油関係資料が貸し出された。醤油関係資料は当館の主要なコレクションの一つであり、当館のみならず他館でも積極的に活用されることを期待したい。画像の提供、利用許可件数は昨年度に比べて大きく増加してい

る(15)。これは、新聞などによる展覧会の取材が非常に多かったことが要因である。

【改善を要する点等】

前年度より引き続き良好に経過していると思われる。

②利用者サービスを図る

すべての利用者に開かれた博物館として、幅広い層の人びとが来館することを目指している。そのため、公共施設としての基本的な機能を維持し、さらに館内施設の充実や利用者・関係者の満足度やニーズを把握して質の高い市民サービスを提供することを心掛けてきた。

【現状評価】

博物館、市民会館ともに通常ベースの開館日数であった(16,17)。博物館の総入館者数と1日平均入館者数は計測開始以降最多となった昨年度とほぼ同数であった(18,19)。リピーター率は昨年度に比べて下がっているが例年並である(20)。これまで初めて博物館を利用した「新規来館市民の割合」も下がっている(37)が、博物館の総入館者数は増えていることから、市外の初来館者が増加した可能性もある。

市民会館の方では、総入館者数と貸部屋利用団体数は昨年度よりも増加し(21,24,25)、過去最多となった。1日平均入館者数と貸部屋稼働率は昨年度とほぼ同数であった(22,23)。また、今年度は2011年度以来3年ぶりに貸部屋利用者満足度(28)のアンケート調査を行った。新たな定期利用団体が増えるなどしているが、依然高い水準を示しており、今後もこれを維持していきたい。

来館者が利用に満足しているかどうかのチェックである、展覧会の満足度、施設の雰囲気や居心地に対する満足度はいずれも微増した(26,27)。展覧会の満足度については、漫画展、絵はがき展が90ポイントを超えており、今後もこの値を維持することが望ましい。

職員・スタッフの対応を受けた来館者の割合(29)は減少したが、対応の満足度は引き続き高い値を保った(30)。

博物館刊行物の販売(32)は、特別展図録『野田で生まれた漫画たち』が好調な売れ行きを示した。昨年度の特別展図録『野田の絵馬』が会期中に完売し、不足したことを受け、今年度は印刷部数を増やしたため、売切れることもなく、会期終了後の在庫数も適度な量となった。刊行物以外の品物の売り上げは昨年度に比べて増加した(33)。今年度は昨年度に課題としていた恒常に販売できるグッズの開発に取り組んだ。野田貝塚出土のミミズク形土偶「ミミー」をキャラクター化し、「ドグウのミミー缶バッジ」(全6種)を作成した。4月から展示室内のカプセル自動販売機で販売したほか、ガイド展会期中限定で「ドグウのミミー缶バッジ」(ガイドver.)も販売した。また、12月から郷土博物館と市民会館の見どころを撮影した絵はがき(全16種)を発行した。いずれも100円(税込)と単価が安いため売上金額としては大きなものではないが、缶バッジ(全6種)も絵はがきも年間を通して売ることができる恒常的なグッズであるため、今後のグッズ開発や利用者のニーズを知る上でも、売れ行きを見守っていきたい。

【改善を要する点等】

前年度より引き続き良好に経過していると思われる。市民会館の利用団体が増えていく中で、利用マナーや部屋利用者と見学者の共存などが問題になってくる可能性もあるため、今年度実施した貸部屋利用者満足度のアンケート調査は今後も定期的に実施していく必要があろう。

③市民の交流の拠点にする

市内の様々なコミュニティに属する団体と広く連携をし、博物館がコミュニケーションの推進役となることで、地域の活性化・まちづくりに繋げていくことを目指してきた。

【現状評価】

交流事業は、台風での中止が続いている観月会が3年ぶりに開催されたため、来場者数は多くなった(38)。さまざまなコミュニティとの連携(39~43)では、比較的バランスよく新規の連携関係を得ることができた。本年度新たに関係のあった団体の具体的な概要は表1の通りである。

近年増えている小学校3年生の「昔の暮らし」の単元での団体見学は今年度も変わらず多く、火のしや電話機などを活用した体験が好評を博している。また、今年度は、6年生のキャリア教育で学芸員の仕事について話す機会をいただいた。歴史や郷土の学習だけでなく、

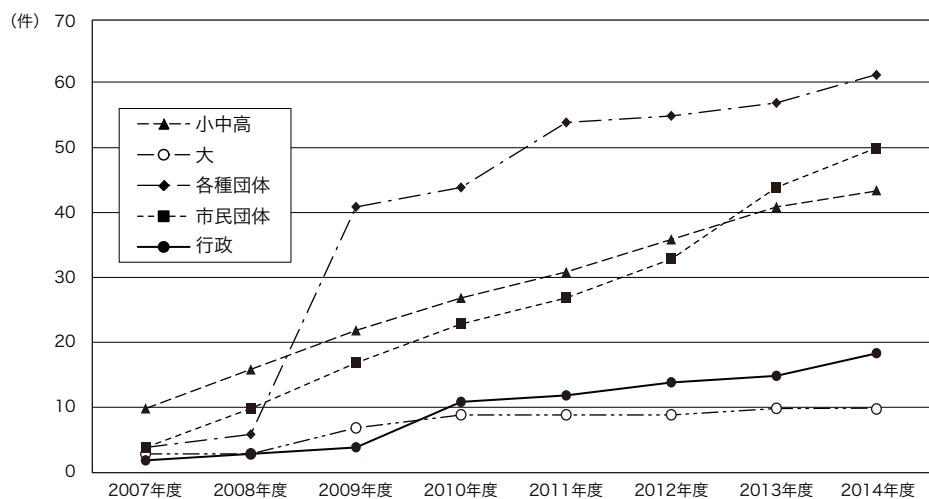
キャリア教育の中で博物館を活用してもらえることは、非常に喜ばしいことである。また、昨年度に学芸員1名が文部科学省の学芸員等在外派遣研修制度を利用し、英国で博物館におけるソーシャルインクルージョン活動の調査を行ったことを活かし、市内の福祉施設スタッフと連携したワークショップ形式の講座を開催した(詳細は50ページ参照)。

【改善を要する点等】

例年の課題であった各種団体(農・商工・医療福祉)との連携(41)について、在外派遣研修の成果を活用して事業を行うことができたが、今後も継続して増やしていく必要がある。また、「昔の暮らし」での小学校団体見学は定着してきている感もあり、今後も積極的に来館してもらえるよう努めていきたい。

コミュニティの種別	団体・グループ名	内容
小中高専	野田市立宮崎小学校3年生(なかよし学級)	小学校見学
小中高専	野田市立二川小学校6年生	キャリア教育授業
各種(福祉)	しゃべり場だんだん	講座、寺子屋講師
各種(商工)	カイロプラクティック健美館	寺子屋講師
各種(その他)	鵜渡川原人形伝承の会	寺子屋講師
各種(その他)	Museum 2015 実行委員会	エクスカーション受入
市民団体	なつかしの道具探究会	企画展、関連事業
市民団体	桜の里自治会	講演
市民団体	野田市ボランティア連絡協議会	ワークショップ指導
市民団体	三友書園	寺子屋講師
市民団体	野田スカイスポーツ振興会	寺子屋講師
市民団体	ハーモニカクラブけやき	コンサート
行政	千葉市立郷土博物館	寺子屋講師
行政	千葉県教育委員会	講演
行政	川崎市市民ミュージアム	特別展

表1 新たに連携をした団体・グループ(2014年度)



④市民や市役所との意思疎通を図る

博物館職員と市民とが対等にコミュニケーションをすること、管理課との意思疎通をスムーズに行い、円滑な博物館運営につなげることを目指してきた。

【現状評価】

博物館と市民との交流の場となっている特別展オープニングレセプションは、今年度も展示協力者も含め、一定数の参加を得ることができた(46)。また、2012年度より設けられた博物館懇談会は、今年度より年2回の開催とした(47)。市民委員5名に向けて展示等の事業報告や事業計画について説明をし、いずれの回も有益なご指摘をいただいた。特に今年度の特別展「野田で生まれた漫画たち」は、2012年度の博物館懇談会で委員よりいただいた意見を参考に企画したものであり、今後も様々な事業に関する意見交換を行っていきたい。本懇談会は博物館評価の一環として位置付けられるものであり、懇談会議事録はホームページでも公開をしている。

次に行政(本庁)と博物館との関係について、博物館職員の訪庁回数(50)は例年並みであったが、市職員の来館回数(48)と市長、副市長、教育長の来館回数(49)が減少している。

【改善を要する点等】

館職員の訪庁と市職員の来館について、円滑な意思疎通のためには、双方がバランスよく訪れることが望ましいと考えられる。来館へのはたらきかけを行っていきたい。

⑤博物館の活動を広める

情報発信をし、市民が博物館の情報を入手しやすい環境を作ってきた。また、メディアに取り上げてもらうことによって、博物館や野田の魅力の向上に努めてきた。

【現状評価】

TV、雑誌、新聞掲載、ロケ地としての利用回数が昨年度に比べて大きく増加した(51,52,53)。特に展覧会に対する新聞の取材が多くなった。昨年度リニューアルしたホームページは、セッション数が増加している(54)。今年度は3月に新たに資料データベースのページを開設し、収蔵品368点の公開を行った。今後どの程度利用されていくか注目したい。また、以前から要望のあった、博物館と市民会館の両施設を合わせたパンフレットを作成し、当館や近隣施設で配布した。

【改善を要する点等】

全体的に順調に推移していると思われる。

⑥市民のキャリアデザインに貢献する

市民が、キャリアデザイン事業に関心をもって参加することを目指した。また、ライフキャリアの各段階に応じた支援をすることで、市民が、学習目標の達成、キャリアの再設計、社会参加や地域貢献へつなげていけるようにした。

【現状評価】

寺子屋講座の平均参加者数(56)、キャリアデザイン事業の平均参加者数(57)、市民参加型企画展の平均入館者数(55)は安定して推移している。モニタリング調査で計測している親子、3世代来館の割合(58)、キャリアデザインの拠点機能の既知(59)も昨年度と同程度であった。

市民のキャリアのステップアップにおいては、なつかしの道具探究会が8月をもって3年間のサポート期間を終えた(60,61)。12月からは来年度の市民の文化活動報告展に向けての準備を行っている。

昨年度から13人体制となった博物館ボランティアは、今年度末にはメンバーの都合により11名体

制となつたが、開館日中の常時有人化という目的に向けて各メンバーがシフトを調整してくれたため、博物館開館日 273 日中、実際の業務従事日は 230 日(64 ページ参照)となり、昨年度に引き続き有人日は 8 割を超えた。来館者への対応も好評を得ており、展示アンケート(44~48 ページ参照)やモニタリング調査(30)からもうかがうことができる。

【改善を要する点等】

自主研究グループにおいては、なつかしの道具探究会が自主活動に移行したことを受けて、全てのグループが自立した。今後はこれまでの経験や反省を踏まえて、効果的な講座の実施やグループ結成後の中長期的なサポートのあり方を検討していく必要があろう。人材バンクについては、未だ内部的な活用に留まっており、利用は少ない(64,65)ため、学校関係者や NPO などを念頭に、活用を図れるような体制づくりを進めていきたい。

